九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

夏目漱石の学習院就職運動 ： 新資料・立花銑三郎あて漱石書簡の紹介

原武, 哲
福岡県立浮羽高校教諭

https://doi.org/10.15017/12070

出版情報：語文研究. 49, pp.1-11, 1980-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

夏目漱石の学習院就職運動

――新資料・立花銑三郎あて漱石書簡の紹介――

原　武　哲

一

『私の個人主義』は、大正三年（一九一四）十一月二十五日（水）学習院輔仁会の依頼により夏目漱石が、学習院学生に対して講演したときの筆記を補筆して、「輔仁会雑誌」（大正四年三月二十二日）に掲載したものである。

この講演で漱石は、自分のような者をよそから連れて来て、講演を聞こうというのは、ちょうど御大名が目黒の秋刀魚を賞翫したようなもので、単に珍しいからであろう、もし自分がこの学校の教授だったならば、多数集まって自分の講演を聴くようなことは起こるまい、なぜそんな仮定をするかというと、昔自分は学習院の教師になろうとしたことがあるからである、と帝国大学卒業直後の回想から話し始めた。

昨秋、学習院に出講を希望し、その周旋を依頼した直接資料が発見された。新資料は明治二十六年（一八九三）七月十二日（水）付立花銑三郎あて夏目金之助（漱石）書簡である。封筒は散佚しているが、立花家の覚書によると、消印は十三日付であり、大学寄宿舎より牛込廿騎町十七番地に出され、巻紙（縦一六六ミリ×横六〇五ミリ）に毛筆で書かれている。立花銑三郎あての漱石書簡は、既に岩波書店版『漱石全集』書簡集に八通収録されているが、今回新たに未公開の一通が長男立花馨氏（東京神宮前在住）宅より発見され、御好意によりその複写が筆者に送られて来た。帝大卒業後大学院に入学した漱石が、親友の学習院嘱託教授だった立花銑三郎に学習院出講の周旋を依頼したもので、結局不採用になり、後に学習院学生から目黒の秋刀魚のように珍重がられたことと思い合わせて、貴重な資料と思われるので、紹介しておきたい。

二

受信人の立花銑三郎は、知る人ぞ知る、ダーウィン『種の起源』日本最初の翻訳者であり、漱石の『満韓ところ〴〵』[注1]では「銑さん」という愛称で描かれている。

立花[注2]銑三郎（旧名、立花銑之助）は慶応三年（一八六七）五月一日岩代国（福島県）伊達郡下手渡（現・福島市東月館町）、立花三池藩陣屋に生まれた。夏目漱石（二月九日生）と同年生まれである。父・立花碩（藩家老）、母・家子の三男で、長兄に小一郎（後に陸軍大将、福岡市長、貴族院議員）、次兄に亀次郎がいた。明治

二年（一八六九）旧立花藩三池領に復するに従い、一家は筑後国（福岡県）三池郡三池町新町百三十四番地（現・大牟田市三池新町）に移住した。明治八年三池新町御木小学に入学、明治十三年五月二日三池小学（御木小学改名）において小学全科を卒業した。同年同月三日筑後国三池郡銀水公立中学に入学、名校長とうたわれた梧園笠間益三（後に第五高等学校教授、倫理・国語・漢文）に嘱望せられ、常に首席を占め飛び越し進級しながら、明治十五年十二月十一日、福岡県々立橘中学校（銀水中学改名）を卒業した。明治十六年一月二十五日、月給八円をもって橘中学三等助教諭に任ぜられたが、同年五月十五日病を理由に辞職し、笈を負うて上京、道中のことを「東征漫詠」「東征漫遊」「招傾日記」と題して綴った。同年六月二日東京神田区私立共立学校に入り、英学を修めた。明治十七年九月十三日東京大学予備門に入学、同年に入学した者に塩原金之助（漱石）、芳賀矢一、福原鐐二郎、正木直彦、南方熊楠がいた。明治二十二年七月八日第一高等中学校（明治十九年四月二十九日大学予備門を変更）本科第一部（文科）を卒業した。塩原金之助（漱石）は明治十九年七月腹膜炎にかかり、第一高等中学校予科二級から一級への進級試験が受けられず留年したため、立花銑三郎より一年遅れて、明治二十三年七月八日卒業した。立花は明治二十二年九月、帝国大学文科大学哲学科（西洋哲学史）に入学、学習院講師、東京専門学校講師にもなった。明治二十三年四月二十八日、芳賀矢一と共編、上田万年校閲の『国文学読本』[注3]（富山房）を出版した。この一書により、立花・芳賀らが国文学の作品にどう価値判断を下して、精選し、教育上文学上の目的をもって通観せしめたか、を知ることができる。明治二十五年七月、夏目金之助・藤代禎輔・松本文三郎・大島義脩らと『哲学雑誌』の編集委員となった。明治二十五年七月十日、帝国大学文科大学哲学科を卒業、直ちに帝国大学大学院に入学、旧三池藩主立花種恭（たねゆき）（学習院初代院長〔明10・10～17・5在職〕）の推輓があったのだろう、同年九月十四日研究のかたわら学習院嘱託教授となり一個年二百五十円を支給され、心理学・倫理学・美学を講じた。また東京専門学校でも社会学・論理学の講師となった。明治二十六年四月十一日手当一個年三百円を支給された。明治二十六年七月、夏目漱石が帝国大学を卒業するに際し、学習院出講に努力したが失敗した。明治二十六年十二月十五日手当として一個年四百円を支給された。明治二十七年九月十五日学習院教課授業を嘱託され、奏任待遇となり、手当として一個年七百円を支給されることとなった。明治二十八年一月四日、曽我祐準（すけのり）子爵の次女・遼子（はるか）と結婚した。明治二十九年三月二十二日、激務のかたわら日本で初めてチャールズ・ダーウィンの『生物始源一名種源論』（経済雑誌社）を翻訳出版した。明治二十九年九月十八日学習院哲学課長を命ぜられた。同年十二月二十五日、学習院教授に任ぜられ、六等に叙せられ、年俸八百円を賜わると同時に、大学院は退学したと思われる。明治三十年二月十日、正七位に叙せられた。同年五月三日、図書館監督を命ぜられ、参事員となった。同年八月七日、長男・馨生まる。同月二十二日、妻・遼子、産褥熱のため、帝大医科榊病室にて死去。同年十二月二十三日四級俸を賜わった。明治三十一年七月五日、曽我祐準の長女・満子（みつ）と結婚した。同年十一月二日、学習院幹事を兼任、六等に叙せられた。同年十一月八日、教務主任を命ぜられ、図書館監督を免ぜられた。同月二十五日参事員を免ぜられた。同年十二月二十日臨時事務勉励につきその賞として七十五

円を給せられた。同月二十八日、五等に叙せられ、六級俸を賜わった。明治三十二年一月三十一日従六位に叙せられた。同年六月六日年俸千円を賜わり、同月二十九日四級俸を賜わった。同年七月二十六日在官のまま欧洲へ渡航を命ぜられ、同年八月三日欧洲渡航につき中学教育に関する取調べを嘱託され、手当として千円を支給され、同月二十八日、教育学研究のため一個年間ドイツおよびイギリスへ留学を命ぜられ（宮内省）、学資として一個年英貨百八十ポンドを支給された。正六位に叙せられた。

明治三十二年八月、日本郵船若狭丸に乗船、横浜港より出航、神戸・門司・上海・香港・シンガポール・ヘナン・セイロン・ポートサイド・マルセイユ・スイス経由で、明治三十三年一月ベルリンに到着した。同年四月よりロンドンに滞在、同年七月十七日留守宅にて蓄子（しげ）生まる。明治三十四年一月中旬、オーストリア（ウィーン）・ハンガリー（ブダペスト）などに長途の旅行をなし、悪性感冒にかかり、ベルリンに帰り、独人ドクトルや留学中の東大医学士の治療を受けたが、ベルリンはこの年極寒にて病重く、「帰国して治療するのが一番よい」と言う長岡外史など日独友人の衆議決し、三月三日帰朝を命ぜられる。三月二十二日ベルリン＝ポツダム駅にて学友に送られ、「春雪の降りて心の寒さかな」の一句を残し、ベルリンを離れ、アムステルダムより日本郵船常陸丸に乗船した。

夏目漱石はベルリンの立花銑三郎から旅行に行くという年賀状を受け、明治三十四年一月三日夜返事を出した。二月五日、漱石はベルリンにいる藤代禎輔に、「立花も病気だってね加原愛想によろしくいって呉給へ」と手紙を書いているところを見ると、藤代か芳賀の知らせで立花の病気を知ったと思われる。三月十八日、漱石は立花銑三郎に手紙を出し、インフルエンザのため、二十四、五日ごろロンドンを経て帰国するそうだが、会いたいので自分の下宿に滞留しないか、と誘った。しかし、三月二十七日付漱石日記によると、アルバート・ドックの常陸丸より立花の書簡が来て、病気で帰国途中との由、漱石は直ちに船に立花を訪問し、涙ながらの最後の対面をした。容態は非常に悪かった。同船している医学士望月惇一、渡辺雷をブリティッシュ・ミュージアムおよびナショナル・ガレリーに案内し、話を聞くと、「立花ノ病気ハダメナリトアリ気の毒限ナシ」（漱石日記）と悲嘆にくれる外なかった。これが立花・漱石の永遠の別離となった。四月十九日漱石はポートサイドから立花からの端書を受け取った。おそらくこれが漱石の受け取った立花の最後の書簡だっただろう。明治三十四年五月十二日午前八時三十分、上海沖の船室において死去した。享年三十五歳であった。一旦は谷中墓地に埋葬されたが、後に多磨霊園に移す。『立花文学士遺稿』（明治三十六年一月二十七日発行、秀英社）は学友正木直彦により編され、芳賀矢一が序文を書いている。

以上が長くなったが立花銑三郎の経歴である。

三

さて、新資料の明治二十六年七月十二日付立花銑三郎あて漱石書簡は次のようなものである。

拝呈本夕織田（磯）氏方へ参り
色々相談仕り候処高師
の方は目下経済上の不都

合の為め多分雇入むづかしから
んとの儀に御座候尤も右はまだ
確と定り候次第にも無之
候得ども餘程あやしく
存候に付き此際断然
決意の上学習院の方へ出
講致し度因て御迷惑ながら
御周旋被下度小生今※六時
発の滝車にて日光へ向け
出発両三日後ならでは帰
京不仕候間右乍略義
書状にて御願申上候村
田君へも右の事情よろしく
御話しの上貴君同様
御尽助被下候様御
取計ひ是祈　先ハ用
事のみ餘拝顔の上
匆々頓首
七月十二日夜　夏目金之助
立花銑三郎様

※ミセケチ

夏目漱石は明治二十六年七月帝国大学文科大学英文科第二期生としてただ一人卒業し、直ちに大学院に入学、「英国小説一般」という題目の下に神田乃武教授の指導を受けた。英文科の第一期生は二年前に卒業した立花政樹のみであった。この年卒業の文学士十五名の就職は困難をきわめ、七月二十六日現在でわずかに本多浅治郎（史学科）の任処が決ったのみであった。漱石は「何分にも炎暑に耐へがたく日々呻吟」しつつ、帝国大学寄宿舎で総勢十三、四人と不景気に寂寥を覚えていた。「当夏卒業の文学士売口大に悪しく皆困却の体」で、漱石も「如何成る事やら頓と不相分今日を今日とのみ未来の考へなく打暮し」ていた。しかし、漱石はただ漫然と職の転り込むのを拱手傍観していたわけではなかった。あちこちに手を打って就職運動もしていたのである。

今回の新資料によると、帝大三年先輩の高等師範学校磯田良（歴史学）に高師出講の周旋を依頼していたが、七月十二日夕方磯田方を訪ねると、「目下経済上の不都合の為め」採用が困難になったことが判明した。漱石と磯田良との仲はそれほど親密とは言えない。磯田が大学を卒業した明治二十三年に、漱石は大学に入学しているから、大学で一緒に学んだことはない。磯田あての漱石書簡は未だ発見されたことはないが、明治二十六年八月十五日付立花銑三郎あて漱石書簡に、「菊池の出仕は磯田の方未だ方付ざる故任命の運びに至らず」とあるのが、漱石の書いたもので「磯田」の名が出てくる唯一のものである。ただし、岩波書店版『漱石全集』第十七巻「索引」（昭和五十一年四月九日）では「磯田良」の項目はなく、前記立花あて書簡⑭五二は「磯田多佳」（二三頁）の項目に誤って入れられている。

高師出講に失敗した夏目漱石は、「此際断然決意の上学習院の方へ出講」しようと思い、当時学習院嘱託教授だった帝大一年先輩の立花銑三郎に学習院出講の周旋を依頼し、帝大英文科撰科を前々年に出た学習院嘱託教授村田祐治にも助力を頼んだのであった。

小西謙氏[注8]によると、漱石の学習院就職について推薦してくれた知人は村田祐治であったと述べておられるが、新資料によれば、むしろ立花銑三郎の方が主役ではなかったか、と思われる。つまり、漱石を学習院に推薦した「此学校にゐた知人」（『私の個人主義』）とは立花銑三郎のことである可能性が強い。勿論、村田祐治は漱石と同じ帝大英文科の同窓（村田は撰科であったという違いはあるが）であったから、骨身惜まず努力したことであろう。今日、村田祐治あて漱石書簡は二通しか発見されておらず、その後の漱石伝記から姿を消しているが、立花銑三郎あて漱石書簡は新資料を含めて九通確認されており、立花の名は『満韓ところ〴〵』においても「銑さん」と愛称され、懐しく語られ、「留学日記」では、「二氏ノ話シニ立花ノ病気ハダメナリトアリ気の毒限ナシ」（明治三十四年三月二十七日付）とあり、満腔の悲しみで最後の別離をした。このような親密度から考えると、立花銑三郎が旧藩主で学習院初代院長立花種恭の権威をも援用して運動したと想像されるのである。

「知人」[注9]（立花銑三郎）は漱石に向かってしきりに大丈夫らしいことを言うので、漱石の方でも、もう任命されたような気分になって、「先生はどんな着物を着なければならないか。」と聞くと、「知人」は、「モーニングでなくては教場に出られない。」と言うので、漱石は採用決定前にモーニングを誂らえて待っていた。

当時、金沢の第四高等中学校教授狩野亨吉（後の第一高等学校長、京都帝国大学文科大学長）は、四高教師獲得のため、明治二十六年八月四日上京して来た。

「狩野君は高中の教師探索の為め未だ帰沢の途につかず過日来小生も段々同氏の説論にあづかり是非奮発の上赴任してくれろと依託被致候へども未だ諾否の返答は不仕候」（明治二十六年八月十五日付立花銑三郎あて漱石書簡）

狩野亨吉は金沢に赴任してまだ満一年間しかたたないのに、もう四高を辞職したいと考え、自分の後任を探索しようと上京して来たのであった。しかし理学（数学）と文学（哲学）を兼備した人物を探すことは至難の業であり、已むを得ぬときは、二人を以て当てたい、と大島誠治校長の諒承を取り付けていた。特に英語教師を求めていたので、当然、帝大英文科専攻の新文学士たる夏目金之助にも赴任を要請した。しかし、漱石は立花銑三郎に依頼した学習院出講の成否が未確定であり、学問をつづけたい気持ちから、東京を離れる決意がつかず、諾否の返答を保留していた。

そこで、「狩野亨吉日記」[注10]によって、狩野の上京から帰沢まで、狩野と漱石との交流をたどってみよう。

明治二十六年（一八九三）

(1)八月四日（金）前日金沢を出発し、長野・高崎を経て、午後九時過ぎ上野着。午後十時飯田町家に着く。

(2)六日（日）大学に夏目金之助を訪い共に散歩する。

(3)七日（月）大学寄宿舎に長谷川（貞一郎）及び夏目を訪う。

(4)十二日（土）立花銑三郎・夏目金之助・村田祐治・平山順外出中に狩野宅に来る。午後八時立花銑三郎を訪うが、不在。そこで村田祐治を訪う。

(5)十九日（土）夏目が留守中に狩野宅に来る。

(6)二十二日（火）晩、夏目・太田（達人）相携えて狩野宅に来る。

(7)二十四日（木）朝、狩野は寄宿舎に夏目を訪う。狩野の留守中、村田（祐治）が来る。午後四時また村田が来て言う、「学習院教師の位地終に重見に帰し夏目ハ遂に敗れたり是偏に工藤の奸計に出つるなり。」と。

(8)二十六日（土）晩、夏目金之助が狩野宅に来る。

(9)九月一日（金）午後八時半、小屋保治（後に大塚）・菅虎雄・夏目が狩野宅に来る。

漱石が在京中の狩野亨吉をしばしば訪問したことは、漱石書簡でも、

「当夏中は御多忙の処度々参上毎度意外の長座定めて御邪魔の事と存候無遠慮の段御海恕可被下候貴校英学教師は何人に定まり申候や」（明治二十六年十月二十七日付狩野亨吉あて漱石書簡）

と書いている。前記の「狩野亨吉日記」によれば、狩野が漱石を訪問して会えた日が三回、漱石が狩野宅を訪問して会えた日が三回、漱石が狩野の不在中に訪問して、会えなかった日が二回ある。この六回の狩野・漱石の会合において、狩野は漱石に金沢赴任を慫慂し、漱石は学習院出講の情勢について語り合ったと思われる。

四

しかるに、漱石の学習院出講問題は意外にも難航した。一個月たっても埒があかなかった。

明治二十六年八月十五日（火）、漱石は、

「小生出講の義につきては種々事情出来余程奇観に御座候何しろ駄目の事とあきらめ居候」（明治二十六年八月十五日付立花銑三郎あて漱石書簡）

と塩原温泉（下野）古町「上会津屋」に湯治に来ていた立花銑三郎に学習院採用は困難のようだと不安を訴え、悲観的になった。情勢が不利になったという情報は、どこから得たかわからないが、結局あたら漱石のモーニングはむなしくなり、米国帰りの重見周吉が、九月七日付で学習院教授に任ぜられた。

八月十五日の時点で、学習院側が英語教師の席を重見周吉に内定していたかどうかわからない。「狩野亨吉日記」によると、

「十六日　神田教授より重見家永皆金沢へ行くを好まずとの書状来る」（明治二十六年八月十六日付狩野亨吉日記）

とある。狩野は帝国大学文科大学教授神田乃武に四高英語教師の斡旋を依頼しており、その候補者の一人に重見（周吉であろう）がいたのである。しかし、重見は神田乃武に金沢赴任を辞退した。その辞退の理由は、十五、六日段階で既に学習院教授採用に成算ありと予測したからであろうか。

八月二十三日（水）、漱石は九月の新学期も間近になったので、学習院嘱託教授村田祐治に学習院出講の件はどのように決定したか、問い合わせた。

「拝啓仕候然らば先日来小子身分の事につき色々御周旋を煩はし奉万謝候然らば其後の成行は如何相成居候や最早九月に間も無之候へば其模様承知仕りたる上方向のつけ方も有之候へば何卒至急御報知被下度過日承り候へば茂見氏学習院の方へきまり候様にも御座候へば小生方は到底駄目と存候へども猶念の為め伺ひ上候猶当月一ぱいに落着不仕候はゞ夫迄の縁とあきらめ他の学校へ従事致すべく候間左様御承知被下度右御含みまで余拝眉の上万々

廿三日　　夏目金之助

村田君

机下」

（明治二十六年八月二十三日付村田祐治あて漱石書簡）

つまり八月二十三日時点で漱石は、既に重見周吉の学習院採用の情報を誰かの通報によって知っていた。そして、彼自身の不採用をいやでも思い知らされたが、なお一縷の望みを託して確認を求めたのである。この重見採用の情報提供者は誰であろうか。やはり立花銑三郎であろうか。

八月二十四日（木）午後四時、学習院嘱託教授村田祐治は金沢より上京中の狩野亨吉を訪ね、「学習院教師の位地終に重見に帰し夏目ハ遂に敗れたり是偏に工藤の奸計に出つるなり」（狩野日記）と報告した。重見採用に力を貸したのは工藤一記であった。

工藤一記[注1]は嘉永六年（一八五三）七月三日豊後国岡藩士飯倉九郎太の三男として、豊後国（大分県）直入郡岡代官町（現・竹田市）に生まれた。明治六年（一八七三）二月先代工藤祐寿の養子となり、同年十二月家督を相続した。明治八年十二月十日大阪師範学校小学師範学科を卒業した。同月十五日岡山県温知学校在勤、同九年三月三日同校幹事を兼務した。同年四月六日岡山県師範学校勤務となり、同年五月十三日同校監事を兼ね、行政的手腕を示している。同年十一月十五日華族会館学校事務所に雇われ、同十年四月十七日同館四等教師に補され、同十一年三月二十二日二等主事となった。同十二年八月二十八日学習院監事心得となり、同十七年七月三十一日学習院が官立になると宮内省御用掛（準奏任）、学習院幹事補兼教授補となった。同十八年九月十六日華族女学校幹事及び教授、同月二十二日学習院幹事兼教授、同十九年二月十日華族女学校幹事兼教授、同二十一年十二月十五日学習院教授兼幹事に任ぜられた。同二十二年一月二十四日庶務課担任を命ぜられ、この当時漱石採用問題が起った。同三十一年十一月八日庶務会計主任となり、同三十二年八月学習院幹事立花銑三郎欧洲留学中かわって教務主任を命ぜられた。明治三十五年六月十七日宮内省文事秘書官に転任し爵位局御用掛を兼任した。次いで帝室会計審査官に任ぜられ同局主事を兼ねた。後、山階宮宮務監督、勅任宮内事務官として宗秩寮に勤務した。大正七年五月宮中顧問官に任ぜられ、この地位で昭和十年（一九三五）死去した。享年八十三。

右のような工藤一記の経歴を見てもわかるように、彼は早くから教育行政家、学校経営者としての辣腕を振ったと思われる。華族会館、学習院の事務の中枢にある庶務や会計を担当して、その秀でた事務能力は、ますます磨きがかかり、冴えを見せたと思われる。明治二十六年七月、漱石の採用問題が起ったとき、学習院院長は第六代田中光顕（在職明治二十五年十月―二十八年三月）であったが、田中院長は帝室会計審査局長官を兼務した時期であったから、学習

院の学校経営は実際的には工藤一記が牛耳っていたと思われる。当時、工藤は数え年四十一歳で在職十七年、働き盛りの実力者であり、一方、立花銑三郎は二十七歳（漱石も同年）、村田祐治は三十歳の青年で前年採用されて満一年もたたない若手の嘱託教授では、所詮工藤の老獪さの敵ではなかったであろう。村田が狩野に「工藤の奸計」と言い放った悲憤のことばは、若い友情の力が強力な政治権力の前に屈服せざるを得なかったときの無念の概嘆ではなかったか。

五

しからば、「米国帰りの人」（『私の個人主義』）である重見周吉とはいかなる人物であったか。

重見周吉[注12]は慶応元年（一八六五）十一月二日伊予国（愛媛県）越智郡今治町大字本町百三十一番地に生まれた。明治五年六月伊予国越智郡弘敵小学入学、同九年三月同校卒業した。同十一年九月伊予国越智郡今治中学入校、同十五年六月同中学を卒業した。同十七年九月十六日米国に留学するため、日本を出発した。同十八年一月八日北米合衆国ニューヘブン・ヒルハウス高等中学校に入校、専ら大学受験科目を修め、かつラテン語を学んだ。同十八年九月十五日米国エール大学理学部に入学、同二十一年六月二十七日同大学同学部を卒業、バチェロル・オブ・フィロソフィーの学位を受けた。同年十月十一日エール大学医学部に入学、同二十四年六月二十四日同大学同学部を卒業、ドクトル・メジチネの学位を受けた。同年同月二十六日エール医学会員に列し、同年十一月八日帰朝した。その後二年間何をしていたか、履歴書に記載はない。そして明治二十六年、夏目漱石との椅子争いに勝ち、九月七日学習院教授に任ぜられた。しかし、第七代近衛篤麿院長（在職明治二十八年三月―三十七年三月）は華族の従事すべき業務として、陸海軍の武官や貴族院議員となる他に外交官となるのが最適であると考え、外交官養成の道を開くため大学科復旧を上申した。外国語教育振興を中心とする学習院の再編成が実現した明治三十五年、重見はその計画からはずされたのであろうか、九月二十九日非職を命ぜられ、同三十八年九月二十八日非職満期になり、学習院を去った。その後の消息はぷっつり絶えてしまう。

明治二十六年八月二十四日（木）、前述のように村田祐治は狩野亨吉を訪ね、「学習院教師の位地終に重見に帰し夏目ハ遂に敗れたり」と報告した後、下野塩原古町上会津屋に逗留していた立花銑三郎あてに、「ナツメノコトスグカイレ」と電報[注13]した。村田が立花に情勢の急変を報知し、善後策を講ずるため、帰京を促したものとみえる。しかし、帰京した立花が村田と協議してどういう処置をとったか、今はわからない。いずれにしても、漱石は不採用と決定し、重見は採用されたのである。

では、漱石はなぜ不採用になったのであろうか。皇族および華族の子弟のための教育機関だった学習院は、私立学校として出発したが、明治十七年四月十七日、宮内省所管の官立学校となった。皇室の庇護厚く特権的存在であったがため、その職員の採用については、厳格な身元調査があったことは想像に難くない。漱石は町方名主の末子で平民である。しかも塩原昌之助の養子に行き、明治二十一年一月には夏目家に復籍している。さらに漱石を決定的に不利にしたのは、明治二十五年四月、徴兵猶予を配慮して北海道後志国岩

内郡吹上町十七番地浅岡仁三郎方に移籍、分家したことであろう。このように格式を重んじる学習院にはなじまない複雑な戸籍を持つ漱石が排され、米国帰りの重見を選んだのは、工藤一記の老獪な深謀であったろう。若い村田祐治が「工藤の奸計」と狩野亨吉に告げざるを得なかった無念さは、漱石への友情として理解できる。

小西謙氏[注14]はこの外に漱石が外国留学をしていなかったがために、米国帰りの重見にしてやられたと考えておられるようだが、あるいはそうかも知れない。松山中学の英語教師となったのも、「洋行の旅費を作る所存」と書き送っているぐらいだから、学習院不採用時の漱石の遺恨[注15]はその後の漱石に屈折した心境を与えたようである。

学習院を不採用になった漱石は、外に着るべき洋服を持たなかったので、モーニングだけは着ていた。漱石にも第一高等中学校（明治二十七年九月十日より第一高等学校と改称）と高等師範学校との二校から就職の口がかかった。漱石は一高へ周旋[注16]してくれた先輩に半分承諾を与えながら、高師にもいい加減な挨拶をしていたので、事態は紛糾してしまった。漱石は先輩なる一高の古参教授に呼びつけられて譴責された。彼は癇癪を起こして、双方とも断ってしまおうと手続をとった。すると或る日、一高校長久原躬弦（みつる）から学校に来てくれという通知があったので、早速出掛けた。その座には高師校長嘉納治五郎と例の先輩がいて、相談は決った、高師に行ったらよかろうという忠告だったので、承諾し採用が決定した。

漱石は高等師範学校英語教授の嘱託を受け、明治二十六年十月十九日より週二回出講し、年額四百五十円の手当を受けることになったのである。

六

明治二十六年八月七日付西谷虎二[注17]あて漱石書簡によると、

「去月中旬菊池米山両人と両三日間日光地方へ罷り越し少しは塵懐の洗濯仕り候」

とあり、七月中旬に菊池謙二郎[注18]、米山保三郎[注19]と三名で日光地方に旅行したことはわかっていたが、詳細は不明であった。しかし、今回の新資料によって、七月十三日（木）午前六時発の汽車で日光に向け出発し、十五日（土）帰京したことが確定した。

注

（注1）『満韓ところ〴〵』十「政樹公の姓は立花と云って柳川藩だから、立派な御侍に違ない。それを何故立花さんと云はないで、政樹公と呼ぶかと云ふに、同じ頃同じ文科に同藩から出た同姓の男がゐた。しかも双方共寄宿舎に這入ってゐたものだから、立花君や立花さんでは紛れ易くて不可ない。で一方は政樹といふ名だから政樹公と呼び、一方は銑三郎といふ俗称だから銑さん銑さんと云った。何故片つ方が公なのに、片つ方はさん付にされて仕舞ったのか、一寸分らない。銑さんの方は、余と前後して洋行したが、不幸にして肺病に罹って、帰り路に香港で死んで仕舞った。そこで残るは政樹公ばかりになった。従って政樹公をやめて立花君と云ったって、少しも混雑はしないのだが、つい立花よりは政樹公の方が先へ出る。矢っ張り中村とも総裁とも云はないで是公と云ひ馴た様なものだらう。」

（注2）立花銑三郎の経歴については、学習院所蔵の履歴書、長男・立花馨氏所蔵の証書、立花馨氏作成の「立花銑三郎年譜」（昭和五十四年十月中旬）を参考にした。

（注3）芳賀矢一、立花銑三郎が外山正一博士に謹呈した一本が国立国会図書館に所蔵されている。その目次を見ると、次のような作品が収録されている。

○柿本人麿（過近江荒都時作歌。高市皇子尊上城殯宮之時作歌）
○山部赤人（望不尽山作歌一首并短歌。神亀元年甲子冬十月十五日幸紀伊国時作歌并短歌）
○紀貫之（土佐日記抄略）
○三代集和歌（古今集九首。後選集五首。拾遺集九首）
○紫式部（源氏物語帚木巻一節。同若紫巻一節。同須磨巻一節）
○清少納言（四季の評。うつくしきもの。風。花）
○源隆国（立兵者見我影成恐語。鬼に瘤とらるゝ事）
○藤原為業（大鏡序）
○鴨長明（方丈記抄略）
○新古今集和歌（十三首）
○葉室時長（小松殿諫父事。落行人々歌南忠度自淀帰詣俊成事。義経落鵯越并畠山荷馬事。）
○阿仏尼（十六夜日記）
○北畠親房（神皇正統記八節）
○吉田兼好（徒然草十節）
○小島法師（俊基朝臣再関東下向事。先帝崩御事。）
○無名氏（謡曲鉢の木）
○無名氏（狂言記いろは）
○芭蕉（俳句廿四首略）
○貝原益軒（家道訓六節。楽訓一節）
○近松門左衛門（国姓爺合戦九仙山の段節略）
○新井白石（源頼朝論。大江広元論。足利尊氏論。浅野長政秀吉を諫むる事。池田信輝父子。井伊直政が事。尺牘一則。折焚柴の記一節）
○室鳩巣（春秋のあらそひ。二人の乞食。楠正成。）
○柳沢淇園（大仏の餅饅頭。其愚には及ぶべからず。払子の賛。用心。土偶人うる翁。絵に魂をいるゝ事。朝顔）
○加茂真淵（隅田川に舟を泛べて月を翫ぶ序。吉野山の花をみてよめる。和歌七首）
○横井也有（乞食画賛。百虫譜。蟬引。袋賛）
○本居宣長（儒者の皇国の書しらずとてある事。ふみよむ事のたとへ。わがをしへ子にいましめおくやう。世の人飾にはからるゝたとへ。あやしき事の説。花のさだめ。雪螢を集めて書をよめる唐土のふること）
○伴蒿溪（自国の美を忘るまじき事。後三条院。神皇正統記史論の評。清氏。米春男の義勇。画人范古の言。猿の孝勇。僧桃水伝。荷田春満伝）
○太田南畝（武功の物語。鼠をせむる詞。庭湖石記。狂歌十首）
○香川景樹（和歌十五首）
○瀧沢馬琴（弓張月、城山中に鶴寃家を窺ふ条。伊豆の海。真法院の苔梅）

（注4）明治二十六年七月二十六日付斎藤阿具あて漱石書簡によると、「本多君以外に任処抔の定まりたるもの無之やに存候何れも奔走最中と存居候」とある。

（注5）明治二十六年八月七日付西谷虎二あて漱石書簡による。

（注6）今回の立花あて新資料では、漱石は「織田氏」に高師就職の斡旋を依頼しているが、当時、高等師範学校関係者に「織田」なる人物は実在しない。従って「織田」は「磯田」の誤記であろうと推定したい。「磯田良」は東京府士族磯田仲の長男で、慶応三年四月十四日生まれた。夏目漱石、立花銑三郎と同年生まれであった。明治二十年七月第一高等中学校文科卒業、明治二十三年七月帝国大学文科大学史学科卒業、大学院に入学し給費生となる。明治二十五年帝国大学文科大学より歴史授業を嘱託せられ、文部省試補となり、高等師範学校教授に転じた。明治二十七年十二月ドイツ・オーストリアに留学、帰朝後明治三十一年十一月より東京高等師範学校教授となり、大正十二年十月辞職する。大正十三年五月一日歿す。享年五十八歳。

（注7）「村田祐治」は千葉県青柳仁左衛門の二男として元治元年（一八六四）九月二日千葉県に生まれた。明治十七年十月先代村田春政の死跡を相続した。千葉中学に学び、明治十八年十月中村敬宇の同人社の全科を卒えた。明治二十年九月東洋英和学校に教えた。明治二十四年七月帝国大学文科大学英文撰科を修了し、明治二十五年九月十四日学習院嘱託教授となり、さらに教授に任ぜられた。明治二十八年十一月第一高等学校教授に転出したが、翌年再び学習院嘱託教授を兼ね、明治三十五年八月まで続けた。昭和九年一高教授を辞職し名誉教授に推され、講師を嘱託された。昭和十四年に一高講師を辞した。

（注8）小西謙「漱石伝の一資料――学習院の椅子争いの相手のことなど――」（『作新学院女子短期大学紀要』第二号、昭和四十九年三月三十一日発行）

（注9）夏目漱石『私の個人主義』

（注10）原本は東京大学教養学部図書館に所蔵されている。複製本が日本近代文学館に保存されている。「狩野亨吉」については、青江舜二郎著『狩野亨吉の生涯』（明治

書院、昭和四十九年十一月三十日発行）参照。

（注11）工藤一記の経歴については、学習院所蔵の履歴書、『人事興信録』（大正四年一月十日発行、大正十四年八月五日発行）を参考にした。なお、「工藤」の名前は明治三十二年二月十一日付立花銑三郎あて漱石書簡の中に出てくる。その内容は、五高三年生徒が落第その後退学したので、学習院高等科三年に無試験で入学させてはくれないか、という転校依頼文である。末尾に「猶弊校長より工藤氏へ対し同様の依頼状相呈し申候筈故御含みにて御相談被下度」とあり、工藤の実力者ぶりがうかがわれる。漱石は六年前自分を不採用にした張本人がこの工藤一記であることを知っていたであろうか。

（注12）重見周吉の経歴については、学習院所蔵の履歴書を参考にした。

（注13）立花馨氏所蔵の日本政府電報送達紙の記事による。

（注14）（注8）に同じ。

（注15）明治二十八年七月二十六日付斎藤阿具あて漱石書簡。

（注16）夏目漱石『私の個人主義』

（注17）鳥取県出身。明治二十七年七月帝国大学文科大学漢学科卒業。

（注18）茨城県出身。慶応三年一月十九日―昭和二十年二月三日。明治二十六年七月帝国大学文科大学国史科卒業。山口高校教授、津山中学校長、千葉中学校長、二高校長、東亜同文書院教頭、三江師範学堂日本総教習、水戸中学校長、衆議院議員。森田美比著『菊池謙二郎』（耕人社、昭和五十一年九月十日発行）参照。

（注19）建築家志望の漱石を文学志望に変えさせた人。金沢出身。明治二年一月―明治三十年五月二十九日。明治二十三年七月第一高等中学校文科卒業、明治二十六年七月帝国大学文科大学哲学科卒業。大学院在学中、「空間論」を研究。大久保純一郎著『漱石とその思想』（荒竹出版、昭和四十九年十二月二十日発行）参照。

〔付記〕未公開漱石書簡を公開して下さった立花馨氏（東京・神宮前在住）、調査に御協力いただいた光華女子大学教授北山正迪氏、福岡大学教授白石悌三氏、故荒正人研究室助手冨田正子氏、岩波書店『漱石全集』係大野初代氏の御厚誼に深謝申上げる。本稿は『毎日新聞』夕刊（全国版）「学芸」（昭和五十四年十一月二十一日付）の「漱石の学習院出講運動と失敗」を増補したものである。

なお、新資料の立花銑三郎あて漱石書簡は刊行中の岩波書店版『漱石全集』（新書判）第三十五巻「補遺」に収録される予定である。